

「現地を訪問して想うこと」

平井 勤 (1978年・文)

東日本大震災の直後、事故を起した福島第一原発の所長であった吉田昌郎氏のルポルタージュ本「死の淵を見た男」(門田隆将著)を読んだ。1960年代の浜通りの寒村での福島原発の建設当初のGE村での日米の子ども達の交流やそれを経験した東電社員の第一原子炉当直員(運転員)の必死の制御操作のようす。原発4号建屋内での津波による溺死で2名の社員が命を落としたことなどを知った。その後、放射線防護学を専門とする立命館大学名誉教授である安斎育郎氏の著書「福島原発事故 どうする日本の原発政策」を読み、事故後の日本政府の原子力政策について一層の疑念をもち、国民、地方の一町村民が、原発の想定外の事故連鎖により、大量の放射性物質をまき散らされ、住居や農業・漁業などの職業を奪い、生活の場を奪った。あの日から5年半の時が過ぎた。原発事故の周辺町村から近くは県内中通り、会津、県外に避難した人達は、すでに避難先での生活を安定させている。避難解除が今年、来年と検討されている町村もあるようだが、5年の年月は長かった。当時小学校1年生だった子は6年生。避難先での友達や都会の便利さや教育環境を海岸部や山間地の不便さと比較するとどちらを選択するか明らかである。親としても、放射能による甲状腺がんやその他の疾病について心配も大きい。子供達の親や若年労働層は、すでに避難先での職に就いているものがほとんどである。町や村に戻っても安定した職がなければ生活できない。政府や自治体が企業の誘致などの政策を示しているが、帰還する町村民は果たして半数に達するかである。高齢者については、年金や蓄え、補償金で生まれ故郷に戻り生活したいと希望するものが多いだろう。しかし、子供達がいないうちには将来はない。10年、20年後には限界集落が見えている。

私は、高等学校で社会科(主に地理と現代社会)を教えている。東日本大震災以降、地理の教科書では、以前にはなかった防災問題を扱う章が出てきた。火山・地震・津波・洪水・土砂災害など、日本に多い自然災害を扱った分野である。中でも災害を防ぐ防災問題が取り上げられている。何度か東北の震災後の検証をしようと考えたが、実行できなかった。近くにはボランティアに出た方や地学の分野から津波災害の視察をした方などがいた。この東北応援ツアーで一部の地域を視察できたが、宮城、岩手なども近いうちに視察しようと重い腰が動き始めた。母校の学生もボランティアに出ている。福島県や宮城県、岩手県の校友会の皆さんも頑張っているようです。このような災害をしっかりと受け止めて、日本のエネルギー政策のあり方、地方の原子力産業への依存解消など国民的な議論の高まりを望んでいます。

このレポートを校正して、校友会に送ろうとしたら、22日早朝の福島県沖のM7.3の地震と津波。今回見学した小名浜の水族館「アクアマリン福島」に被害がなくてほっとしました。